

# 「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の 使用環境をめぐって

—日本語教育における類義表現の扱いへの示唆

龔 柏榮

## ◆要旨

**本**稿は「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を類義表現として取り上げ、コーパスから抽出したデータに基づいて「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境を調査し、その傾向を明らかにすることを目的とするものである。調査結果として、両表現の使用は書き言葉と話し言葉によるジャンルと出現位置に異なる傾向があることがわかった。また、両表現の選好されやすい使用環境を踏まえて、意味との関連についても言及した。最後に、明らかになった「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境に即して、日本語の内省が効かない学習者に両表現の違いが分かりやすい指導法を提案した。

## ◆キーワード

ノデハナイ、ワケデハナイ、使用環境、類義表現

## ◆ABSTRACT

This paper discusses “nodewanai” and “wakedewanai” as synonymous expressions, analyzing the environment in which each construction appears from corpus data and identifying patterns in usage. It was found that for each phrase, there were differing trends in genre, written versus spoken usage, and where the construction appeared in a sentence. Additionally, the relationship between the meaning of the phrases is touched upon based on environments where both constructions are likely to appear. Finally, based on the different “nodewanai” and “wakedewanai” usage environments, a teaching method to aid second-language learners of Japanese in differentiating the constructions is proposed.

## ◆KEY WORDS

nodewanai, wakedewanai, usage environment, synonymous expression

## Usage Environments of “nodewanai” and “wakedewanai”

Toward a Framework for Handling Synonymous Expressions in Japanese Language Education

KUNG PO-RONG

## 1 はじめに

第二言語として日本語を学ぶ学習者にとって、類義表現は適切に使い分けことが難しい。現行の日本語教育では類義表現の差異は抽象的な意味記述がなされていることが多い。これは、日本語学の分野において行われてきた文法記述がそのまま日本語教育の現場で使われているためであると考えられる。当然のことながら、日本語の内省が効かない学習者にとって、抽象的な意味記述から適切な使用や使い分けに繋げることは困難である。そのため、日本語教育の観点から考えると、意味的または機能的に類似した類義表現は、学習者の立場に立ち、より丁寧に記述しなければならない。しかし、このような観点から、類義表現の文法記述がなされた研究は小林 (2005)、小西 (2009)、小西 (2011) など、まだ限定的である。小西 (2011) は学習者の類義表現の理解と産出を促進するためには、実態調査に基づいた傾向を把握し、「使用環境」から選好傾向を記述することが重要になると指摘している。つまり、文法的にはいずれを用いてもよいが、ある使用環境では一方がよく使われ、別のある使用状況ではもう一方がよく使われる、といったようなものである。ただし、選好傾向の記述は従来の文法記述とは方向性が異なり、正誤の判断を行うことができない。なぜなら、一方が使用されやすい環境で他方を使用しても意味的には通じるからである<sup>[註1]</sup>。

本稿では、「説明」を表す「のだ」「わけだ」の否定形式「ノデハナイ」「ワケデハナイ」を取り上げる。特に「使用環境」の言語外的要素、言語内的要素の傾向を把握することにより、両者の差異を記述する。この両表現を選ぶ理由は、「のだ」「わけだ」が説明表現の代表的な言語形式であり、多くの学習者が中級の段階でその差異を把握することが求められるためである。また、庵 (2015)<sup>[註2]</sup> の日本語学の知見から新たに検討されたレベル別の文法項目の中では、その否定形式にあたる「のではない」と「わけで(は/も)ない」は中級レベルに属する文法項目として分類されている。以上のことから、中級以降の段階に進む過程にある日本語学習者にとって「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」は習得すべき文法項目であると考えられる。

しかし、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」は類義表現として取り上げられながら、母語話者の内省を用いた主観的な意味記述が多いため、本稿はコーパスから抽出したデータに基づいて量的に「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境を調査し、その傾向を明らかにすることを目的とする。使用環境として、ジャンル別に「書き言葉と話し言葉」「主節と従属節」の選好傾向を考察し、分析する。また、量的に調査を行った上で、使用環境からみた選好傾向と意味との関連についても言及する。

## 2 先行研究

「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を類義表現と捉えて分析する先行研究はそれほど多くないが、それぞれの意味用法を考察したものとして、工藤 (1997)、庵ほか (2001)、泉原 (2007)、田中 (2010) などがある。そのなかでも、工藤 (1997) は「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の共通性と相違性を記述し、両表現の意味と機能について比較している。「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」には、それぞれ2つのバリエーションがあると指摘しており、前者には〈説明の否定〉と〈言葉づかいの否定〉があり、後者には〈結論の否定〉と〈程度否定〉があるとまとめている。

- ・「ノデハナイ」
  - 〈説明の否定〉：先行文の内容の側面に言及する
  - 〈言葉づかいの否定〉：言語形式の側面に言及する
- ・「ワケデハナイ」
  - 〈結論の否定〉：現実世界の事態の存在の有無を、推論を介して間接的に否定する
  - 〈程度否定〉：事態の存在の有無そのものの量的側面を部分的に否定する

工藤 (1997) では〈説明の否定〉用法にあたる「ノデハナイ」と〈結論の否定〉用法にあたる「ワケデハナイ」については相互言い換えができる場合が多いが、〈言葉づかいの否定〉用法にあたる「ノデハナイ」と〈程度否定〉用法にあた

る「ワケデハナイ」については基本的に相互言い換えが不可能であると述べている。

また、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を相互に言い換えることができる用例として(1)と(2)を、言い換えることはできない用例として(3)と(4)を取り上げている。

- (1)「お父さんたら、早起きをするため早起きをするんじゃないのよ。あたしたちに小言をいうため、早起きをするんだわ。」
- (2)「どうした？」  
と広岡は声をかけた。「君を責めるつもりでここへ呼んだわけじゃないんだ。……」
- (3)「月に帰りなさい、君」と言って僕のガールフレンドは去っていった。いや、去っていったんじゃない。戻っていったのだ。
- (4) 会話は沈黙がちであった。だが決して気まずいわけではない。

(工藤1997:81,84,92)

本稿は「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境の調査を目的とするため、こうした「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の意味用法に関する検討には深く立ち入らず、工藤(1997)の研究の蓄積を土台として「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境と意味との関連を分析することとする。

### 3 研究課題と調査概要

#### 3.1 研究課題

本稿は、先行研究と研究目的を踏まえ、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の「使用環境」を重視するという記述方針をとるため、以下の研究課題を設定する。

RQ1. 言語外的要素であるジャンルから、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」

にはどのような特徴や傾向が見られるか。

- RQ2. 言語内的要素である出現位置から、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」にはどのような特徴や傾向が見られるか。
- RQ3. 「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の意味がジャンルと出現位置の特徴や傾向とどのように関係しているか。

#### 3.2 使用コーパス

本稿で使用したデータは以下の通りである。

- ・書き言葉コーパス  
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)
- ・話し言葉コーパス  
『名大会話コーパス』(NUCC)  
『現日研・職場談話コーパス』(職場コーパス)

先行研究においては「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」に意味的な異なりがあるとしているが、書き言葉と話し言葉との違いといった部分においては調査の蓄積がない。そのため、媒体の差による両表現の使用実態や差異を記述するため、分析には書き言葉と話し言葉の双方を用いた。また、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境を明らかにするためには、複数のコーパスを比較する必要がある。そのため、書き言葉コーパスには多数のジャンルが揃っている『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を選び、話し言葉コーパスには『名大会話コーパス』と『現日研・職場談話コーパス』を選択した。

#### 3.3 調査方法と調査対象

調査方法に関して、『BCCWJ』、『NUCC』と『職場コーパス』の全データを対象にして、コーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて検索を行った。検索に際して書き言葉と話し言葉の特徴を考慮して、調査に用いるキーワードは「デハナ」「ジャナ」とした。その上で、以下のような対象外の例を目視で取り除いた。

(5) ひょっとして自分はいちばん肝心な部分の記憶を失ってしまっているんじゃないかとふと思うからだ。

(OB3X\_00276 : 特定目的・ベストセラー)

用例を検索した結果、考察対象となる用例として『BCCWJ』から、「ノデハナイ」7925例、「ワケデハナイ」12608例を抽出した。また、『NUCC』から、「ノデハナイ」433例、「ワケデハナイ」264例を抽出した。そして、『職場コーパス』から、「ノデハナイ」150例、「ワケデハナイ」26例を抽出した。この段階では工藤（1997）に基づいた意味分類は行っていない。4節では「ノデハナイ」「ワケデハナイ」の出現数および割合を、ジャンル別（書き言葉と話し言葉）と出現位置（主節と従属節）の相関関係を可視化するためのクロス集計をそれぞれ行う。

### 3.4 本稿で援用する概念

小西（2011）では、言語の差異を第二言語としての日本語教育の観点から記述する場合、「形」「意味」「使用環境」という三点を常に連動させる必要があると述べている。また、類義表現が差異を生み出す最も重要な要因は「使用環境」であると主張している。日本語教育における差異の記述は、「形」と「意味」「使用環境」を伴って記述されることで初めて意味を持つと指摘していることから、本稿は小西（2011）が提起する記述方法に倣い、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の差異について特に「使用環境」<sup>[註3]</sup>から記述を行う。

## 4 コーパスからみる「ノデハナイ」「ワケデハナイ」の使用環境

### 4.1 ジャンル別の調査結果と考察

本項では、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」のジャンル別の出現頻度調査の結果を示す。ジャンルは、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の「使用環境」のうち、言語外的要素にあたる。表1は、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の出現数とジャンル別の使用傾向との関連を示したものである。また、ジャンル別の出現数について100万語あたりの調整頻度も示す。

表1 ジャンル別に見た「ノデハナイ」「ワケデハナイ」の出現数と比率<sup>[註4]</sup>

媒体	ジャンル	総語数	ノデハナイ	100万語単位		ワケデハナイ
書き言葉	新聞	1370233	41	29.2(1)	48.2(1.7)	66
	雑誌	4444492	288	64.8(1)	92.5(1.4)	411
	文学	20139268	1826	90.7(1)	179.3(2)	3611
	文学以外	42533142	4199	98.7(1)	124.2(1.3)	5283
	白書	4882812	50	10.2(1)	14.3(1.4)	70
	知恵袋	10256877	717	69.9(1)	148.9(2.1)	1527
	ブログ	10194143	438	43(1)	85.1(2)	868
	法律	1079146	0	0	0	0
	広報誌	3755161	47	12.5(2)	6.4(1)	24
	教科書	928448	53	57.1(1.6)	36.6(1)	34
話し言葉	韻文	225273	7	31.1(1.4)	22.2(1)	5
	国会会議録	4497761	259	57.6(1)	157.6(2.7)	709
	雑談	2005675	433	215.9(1.6)	131.6(1)	264
	職場	402742	150	372.4(5.8)	64.6(1)	26

「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の出現総数と100万語の出現数を比較すると、ジャンル別の使用傾向は以下のようにまとめられる。

#### ・ジャンル別の使用傾向

「ノデハナイ」 > 「ワケデハナイ」

書き言葉：「広報誌」「教科書」「韻文」

話し言葉：「雑談」「職場」

「ノデハナイ」 < 「ワケデハナイ」

書き言葉：「新聞」「雑誌」「文学」「文学以外」「白書」「知恵袋」「ブログ」

話し言葉：「国会会議録」

まず、書き言葉を見ると、「広報誌」「教科書」「韻文」においては「ノデハナイ」が優勢である。「広報誌」「教科書」「韻文」以外のジャンルにおいて、「ワケデハナイ」が優勢である。話し言葉では、「雑談」「職場」で「ノデハナイ」が優勢で、「国会会議録」で「ワケデハナイ」が優勢である。

次に、「ノデハナイ」が選好されやすいジャンルに関して、その特徴を分析

する。書き言葉において「ノデハナイ」が選好されるのは、「広報誌」「教科書」「韻文」であった。「広報誌」では「ノデハナイ」が「ワケデハナイ」の2倍近くあるが、「教科書」と「韻文」ではそれぞれ1.6倍と1.4倍である。一方、話し言葉においては、「雑談」で「ノデハナイ」が「ワケデハナイ」の1.6倍であり、「職場」では5.8倍と「ノデハナイ」の比率が非常に高い。

そのうち、「雑談」と「職場」は雑談会話としての特徴を持っている。小西(2011:113-115)で規定した各コーパスにおけるジャンルの特徴<sup>[註5]</sup>を踏まえて考えると、①単独の発信者、②単独、もしくは複数の受信者、③発信者と受信者の一対一性、もしくは一対多性による相互作用性の高さ、④様々な共有知識、が挙げられる。そのような特徴を有する話し言葉のジャンルにおいては、基本的に「ノデハナイ」が用いられると予想される。しかし、同じ話し言葉であっても、「国会会議録」では「ワケデハナイ」が「ノデハナイ」の2.7倍である。これは質疑応答においては改まった言葉づかいをするために、「ワケデハナイ」の使用が選好されやすいのではないかと考えられる。

その一方、「ノデハナイ」より「ワケデハナイ」が選好されやすいジャンルとしては、「新聞」「雑誌」「文学」「文学以外」「白書」「知恵袋」「ブログ」がある。ジャンルとしての特徴から考えると、「知恵袋」と「ブログ」を除く5ジャンルに、類似性が見られる。これら5つのジャンルの共通する特徴として、①発信者が単独であること、②不特定多数の受信者が閲覧すること、そして、③発信者と受信者との相互作用性がないこと、が挙げられる。

## 4.2 出現位置の調査結果と考察

本項では、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を出現位置という観点から分析する。出現位置は、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の「使用環境」のうち、言語内的要素に該当する。「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を、主節に現れやすいか、それとも従属節に現れやすいか、という傾向の違いによって特徴づけたい。主節の場合は、それぞれ「のではない」「んじゃない」と「わけではないんですよ」「わけではなさそう」のように「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」が現れている。一方、従属節の場合は、それぞれ「のではなくて」「のではない」と「わけではないし」「わけではないが」のように、文中や

連体修飾の修飾部になっていることがわかる。以下、表2は「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の出現数および割合を、ジャンル別と出現位置でクロス集計したものである。また、出現比率に差が見られる場合には、比率の高い方を網掛けで示す。

表2 ジャンル別に見た「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の出現位置

媒体	ジャンル	主節		従属節	
		ノデハナイ	ワケデハナイ	ノデハナイ	ワケデハナイ
書き言葉	新聞	14(34.1%)	38(57.6%)	27(65.9%)	28(42.4%)
	雑誌	57(19.8%)	207(50.4%)	231(80.2%)	204(49.6%)
	文学	1046(57.3%)	2043(56.6%)	780(42.7%)	1568(43.4%)
	文学以外	1040(24.8%)	3099(58.7%)	3159(75.2%)	2184(41.3%)
	白書	5(10%)	35(50%)	45(90%)	35(50%)
	知恵袋	179(25%)	539(35.3%)	538(75%)	988(64.7%)
	ブログ	121(27.6%)	289(33.3%)	317(72.4%)	579(66.7%)
	法律	0	0	0	0
	広報誌	1(2.1%)	11(45.8%)	46(97.9%)	13(54.2%)
	教科書	14(26.4%)	25(73.5%)	39(73.6%)	9(26.5%)
話し言葉	韻文	5(71.4%)	4(80%)	2(28.6%)	1(20%)
	国会会議録	38(14.7%)	215(30.3%)	221(85.3%)	494(69.7%)
	雑談	273(63%)	115(43.6%)	160(37%)	149(56.4%)
	職場	120(80%)	13(50%)	30(20%)	13(50%)

表2から、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の出現位置に相補分布的な傾向があることがわかる。書き言葉においては、「ノデハナイ」が従属節に多く現れるのに対し、「ワケデハナイ」が主節に多く現れている。一方、書き言葉に比べて話し言葉においては、「ノデハナイ」が主節に多く現れるのに対し、「ワケデハナイ」が従属節に多く現れている。加えて、「国会会議録」は話し言葉であるが、両表現の出現位置は書き言葉に見られる傾向と一致するという興味深い結果が示されている。

以上、これまで抽象的な意味記述がなされてきた「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」だが、今回の考察を通して具体的にどのようなジャンルで使われやすいのかということが明らかになった。学習者に「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の用法を提示する際には、このような「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」

の書き言葉と話し言葉で見られる出現位置の傾向を念頭に置いて導入することが望ましい。

## 5 「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境について ——工藤（1997）に基づく検証

「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を量的に調査した結果、両表現の使用は書き言葉と話し言葉によるジャンルと出現位置に異なる傾向があることがわかった。本節では定量的な手法の限界を踏まえつつ、定性的な調査として、この傾向と意味の間の関連性を明らかにする。考察対象となる用例を書き言葉コーパスから300例、話し言葉コーパスから100例を無作為に抽出し、それら进行分析した。考察する用例については、媒体と出現位置に分けた上で、工藤（1997）を参照し、意味用法の分類を行う。以下、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」による媒体と出現位置の出現状況と意味用法の相関関係を表3に示す。

表3 「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の抽出数および割合からみる使用環境

考察対象	媒体	出現位置	意味用法	抽出数	割合(%)	
ノデハナイ	書き言葉	主節	説明の否定	84	28	
			言葉づかひの否定	33	11	
		従属節	説明の否定	111	37	
			言葉づかひの否定	72	24	
		話し言葉	主節	説明の否定	64	64
				言葉づかひの否定	11	11
	従属節		説明の否定	13	13	
			言葉づかひの否定	12	12	
	ワケデハナイ	書き言葉	主節	結論の否定	94	31.3
				程度否定	62	20.6
従属節			結論の否定	85	28.3	
			程度否定	59	19.7	
話し言葉			主節	結論の否定	33	33
				程度否定	12	12
		従属節	結論の否定	41	41	
			程度否定	14	14	

4節で両表現をジャンル別と出現位置から考察した段階では、まだ工藤（1997）に基づいた意味分類を行っていない。本稿の目的は学習者の視点に立った類義表現の記述を行うことであるため、意味用法の検討には深く立ち入らないが、特に学習者の混乱を招くと考えられる両表現が言い換え可能な用法に着目する。

本節では、特に「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の相互に言い換えられる用法にあたる「説明の否定」と「結論の否定」に注目する。それらの抽出数からみる傾向と4節で検討してきた「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境からみる選好傾向との一致性を検証する。

まず、表3をもとにして相互に言い換えられる用法である「説明の否定」と「結論の否定」を表4に示す。

表4 「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の言い換えられる用法からみる使用環境

考察対象	媒体	出現位置	意味用法	抽出数	割合(%)	番号
ノデハナイ	書き言葉	主節	説明の否定	84	28	65
		従属節	説明の否定	111	37	
	話し言葉	主節	説明の否定	64	64	77
		従属節	説明の否定	13	13	
ワケデハナイ	書き言葉	主節	結論の否定	94	31.3	59.6
		従属節	結論の否定	85	28.3	
	話し言葉	主節	結論の否定	33	33	74
			従属節	結論の否定	41	
		従属節	結論の否定	41	41	
			従属節	結論の否定	41	

次に、4節で明らかになった「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の媒体と出現位置による選好されやすい使用環境について、表4に対応する割合と番号をそれぞれ付け加えたものを以下に示す。主節と従属節という環境に出現した「説明の否定」と「結論の否定」の用法については、『BCCWJ』の例を取り上げる。

- ・「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」による選好されやすい使用環境の比較  
「ノデハナイ」>「ワケデハナイ」

書き言葉－従属節：②37%>⑥28.3%

話し言葉－主節：③64% > ⑦33%  
「ノデハナイ」 < 「ワケデハナイ」  
書き言葉－主節：①28% < ⑤31.3%  
話し言葉－従属節：④13% < ⑧41%

(6) 単に記憶を失ったために、混乱が起きているのではない。記憶が空白になっている間に、どれほど奇想天外な出来事があったと仮定しても、とうてい現在の状況を説明することはできないように思える。

(LBn9\_00113: 図書館・書籍)

(7) 献身とは、牧師や宣教師になることに限定されるのではなく、みことばを伝える働きに召されていくか、この世の秩序の回復のために実社会で仕え、働くかという使命の違いなのです。(PB41\_00069: 出版・書籍)

(8) 彼女たちがなにかしているところを目撃したわけではなかった…ただ暗がりにすわっていただけだ。

(LBp9\_00228: 図書館・書籍)

(9) 黙って聞き入っているわけではなく、寝ている方がほとんどでした。

(OY15\_05541: 特定目的・ブログ)

工藤(1997)に基づいた意味分類を行った結果、相互に言い換え可能な両表現の用法が、他の言い換えが可能ではない用法よりも多く出現していることがわかった。また、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の選好されやすい使用環境と相互に言い換えられる用法からみた使用環境の選好傾向が一致することもわかった。

## 6 まとめと日本語教育への示唆

### 6.1 本稿のまとめ

本稿では書き言葉のコーパスとしての『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)および話し言葉のコーパスとしての『名大会話コーパス』(NUCC)と『現日研・職場談話コーパス』(職場コーパス)で抽出した用例に基づいて、ジャ

ンル別、出現位置と意味との関連性から「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を考察し、分析した。結果は以下のようにまとめられる。

- 1) 書き言葉においては「ワケデハナイ」が使われる傾向がある一方、話し言葉においては「ノデハナイ」が多用されることが観察できた。
- 2) 出現位置を主節と従属節に分けて考察したところ、書き言葉における「ノデハナイ」は従属節に現れやすく、「ワケデハナイ」は主節に現れやすいことがわかった。その一方、話し言葉における「ノデハナイ」は主節に出現する傾向があり、「ワケデハナイ」は従属節に出現する傾向が確認された。
- 3) 「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を工藤(1997)が指摘する「説明の否定」「言葉づかいの否定」および「結論の否定」「程度否定」で検討した結果、いずれの媒体においても、相互に言い換えることができる「説明の否定」と「結論の否定」の出現率が高く、言い換えが不可能とされる「言葉づかいの否定」と「程度否定」の出現率が低いことがわかった。また、意味の面から検討した媒体の差には特徴と言えるものはそれほどない。

### 6.2 日本語教育への示唆

本稿は、日本語の内省が効かない学習者が「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」を使い分けようとする場合、手掛かりになるのは、抽象的な意味記述ではなく、選好されやすい使用環境の情報提示であると考えられる。前述の1)と2)を踏まえて、学習者に両表現の用法を提示する際に、書き言葉と話し言葉に見られる傾向をそれぞれ作文や読解、および会話や聴解の授業に導入することが望ましい。また、日本語教育で導入する際には、3)の使用実態に即して、相互に言い換えられない使い分けとして「言葉づかいの否定」による「ノデハナイ」の用法と「程度否定」による「ワケデハナイ」の用法の説明に工夫を凝らす必要がある。その上で、相互に言い換えられる使い分けである「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の用法を使用されやすい環境で使い分ければよいのではないかと考える。

次に、本稿では明らかになった「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境を踏まえ、日本語学習者に分かりやすい指導法を提案する。まず、図1に示すように《どんなときに使う》では言語外的要素にあたるジャンル（書き言葉と話し言葉）を4技能（読む、書く、聞く、話す）に変え、《どこで使う》では言語内的要素にあたる出現位置（主節と従属節）を文末と文中に変える。また、《どんなときに使う》と《どこで使う》を踏まえて、《何をを使えばいい》で示すように4つのアウトプットが得られる。

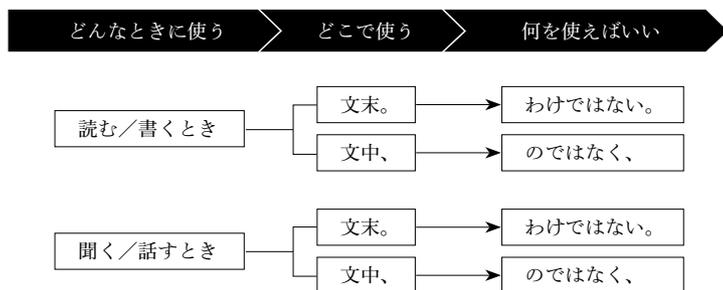


図1 4技能と使用位置からみる「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使い分け

ここで注意を払う必要がある点としては、選好傾向の記述は従来の文法記述とは異なり、正誤の判定を行うことができないことである。例えば、「ノデハナイ」が選好されやすい環境で「ワケデハナイ」を使ったとしても非文とはならない。しかし、白川（2002:70）の言葉を借りれば、「学習者が知りたいのは、文脈を捨象した抽象的な意味ではなく、むしろ、具体的にどんな場面で使われるのかということであり、具体的な用法の背後にある本質的な意味は、いろいろな用法を習得して行く中で次第に見えてくればよい」のである。それゆえ、使用環境からみた選好傾向の記述が重要であると考えられる。

### 6.3 今後の課題

今回は「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境について、両表現の差異と比較しながら媒体、ジャンル、出現位置の点から考察し、それぞれの選好

傾向を検討した。また、このような使用環境に意味的な裏付けを与えるため、工藤（1997）で指摘する相互に言い換えられる用法を参照しながら論じた。「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の共起表現、出現位置の傾向に関連する要因の検討、使用環境と相互に言い換えられない用法との関連性の解明は課題とした。

〈名古屋大学大学院生〉

#### 注

- [注1] ……小西（2011）が「から」と「ので」を類義表現として扱う際に言及されるこの概念を本稿では考察対象となる両表現の議論に援用したいと考える。
- [注2] ……庵（2015）は、『BCCWJ（書籍・コア）』、『新書コーパス』、『新聞コーパス』と『名大会話コーパス』計4つのコーパスを用いて、出現頻度とそれぞれのコーパスにおける特徴項目をもとに、新たにレベル別の文法項目を構築している。
- [注3] ……小西（2011:16）では「使用環境」を「ある言語形式が使用される文脈や場面に関する要素」と定義している。さらに、「使用環境」には、言語内的要素と言語外的要素を含むとしている。前者はある言語形式の前後の文脈にある言語的な要素であり、後者は発話するときの状況などの言語以外の要素を指すと説明している。また、小西（2011:17）は、言語内的要素と言語外的要素には、それぞれ文中の共起語や連続する言語形式の連鎖、言語形式が使用される場面やその使用者、媒体などと述べている。
- [注4] ……本稿は小西（2011）を参考にし、抽出された用例をBCCWJの「レジスター」にあたる「ジャンル」で分類する。BCCWJにおける「出版・書籍」「図書館・書籍」「ベストセラー」を日本十進分類法（NDC）で統合した上で、「文学」と「文学以外」に分ける。しかし、「分類なし」に該当する用例数がそれぞれ「ノデハナイ」の155例と「ワケデハナイ」の230例あった。分析の便宜上、それらの用例を対象外とした。さらに、「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」によるジャンル別の出現数について100万語単位の調整頻度を比較し、少ない方を「1」とした場合の出現比率を（）に記した。出現比率に差がある場合には、比率の高い方を網掛けで表示する。
- [注5] ……小西（2011）ではこれまでの先行研究を踏まえて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)、『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)、『現日研・職場談話コーパス』と『名大会話コーパス』(NUCC)について、(ア)参加者、(イ)参加者の関係、(ウ)チャンネル、(エ)産出と理解の状況、(オ)場面、(カ)伝達の目的、(キ)話題、(ク)文体、といった8つの要素から各コーパスにおけるジャンルに特徴づけを行っている。

---

## 参考文献

- 庵功雄 (2015) 「日本語学的知見から見た中上級シラバス」 庵功雄・山内博之 (編) (2015) 『データに基づく文法シラバス』 pp.15-46. くろしお出版
- 庵功雄・中西久実子・高梨信乃ほか (著) (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- 泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』 研究社
- 工藤真由美 (1997) 「否定文とディスコース—「～ノデハナイ」と「～ワケデハナイ」』 『ことばの科学』 8, pp.66-102. むぎ書房
- 小西円 (2009) 「「から」「ので」の形態的特徴と使用ジャンル—BCCWJを用いた定量的調査」 『社会言語科学会 第24回大会発表論文集』 pp.180-183. 社会言語科学会
- 小西円 (2011) 『日本語教育のための「形」「意味」「使用環境」を連動させた選好傾向の記述—初級の類義表現を事例として』 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文
- 小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」 『日本語教育』 125, pp.9-17. 日本語教育学会
- 白川博之 (2002) 「記述的研究と日本語教育—「語学的研究」の必要性と可能性」 『日本語文法』 2(2), pp.62-80. 日本語文法学会
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』 ひつじ書房
- 

## 使用コーパス

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (BCCWJ)
- 『名大会話コーパス』 (NUCC)
- 『現日研・職場談話コーパス』 (職場コーパス)
-